例会・集会スケジュール

6月12日(日)　小豆島　神戸ポートタワー中突堤　前夜詳細未定

6月19日(日)　歩荷　菊水ルンゼ～摩耶山　平野8:30　CL田中

6月26日(日)　八幡谷～五助谷～阪急岡本8:30　CL神田

7月　3日(日)　保塁岩RCT　阪急六甲　前夜8:30　CL星野

10日(日)　仁川渓谷RCT～ゴロゴロ岳　仁川駅　8:30　CL田中

17日(日)　藤内壁　詳細未定　CL内藤

24日(日)　歩荷　帝釈山　箕谷　9:00　CL幸内

7月31日(日)　歩荷　菊水ルンゼ～城ケ越(RCT)～市ケ原　平野8:30　CL相馬

8月　7日(日)　準備会10:00研修所

委員会：6月1日(水)・7月　6日(水)　19時　神戸登山研修所

集　会：6月8日(水)・7月13日(水)　19時　神戸登山研修所

月報

神戸山岳会

No. 82

52.6.10

発行　神戸山岳会
神戸市生田区中山手通1丁目105の9　前田方

編集　植原・神田・田中

＝目　　次＝

52年度総会報告・新役員

52年度冬山合宿報告 …… 1

はじめに……梅原慶彦…… 2

行動記録……野上哲男…… 3

食料係として……星野辰也…… 5

食料係指導として……野上芳宏…… 6

装備係として……内藤正司…… 6

感想……野上芳宏…… 7

感想……野上博司…… 7

合宿の感想と反省……内藤正司…… 8

感想……星野辰也…… 9

この合宿で得たもの……野上博司…… 9

合宿余話……内藤正司…… 10

最後に……梅原慶彦…… 10

個人山行

阿弥陀岳南稜……星野辰也…… 11

滑川本谷中央稜……星野辰也…… 12

3月の奥美濃……神田章吉…… 13

北鎌尾根～槍・穂高縦走……星野辰也…… 15

裏銀座　太郎山～槍ケ岳縦走……田中正裕…… 17

52年度総会報告．新役員

昭和52年度総会での決定事項

去る5月15日、登山研修所にて総会がおこなわれ、下記事項が決定した。

1. 新担当者

委員長	岸本	分科会	
副委員長	野上博、梅原	技術	梅原
運営委員		遭対	武田
企画	野上芳、星野、神田、田中	山の集い	武田
装備	幸内、神田	海外	―
月報	植原、神田、田中	リーダー会	野上芳、野上博、梅原
庶務	植原、萩本		武田、植原
会計	梅原	正会員承認	神田、相馬
兵連役員			
理事	岸本		
評議員	岡田、武田		

2. 新役員の抱負

企画 ― 会員の意見を尊重して企画して行きたい。

装備 ― 夏までにザイルをチェック、購入したい。

庶務 ― ガリバン印刷は一手に引受けます。

会計 ― 集金人に徹します。

月報 ― なるべく多く出したい。

3. 52年度方針

今まであまりにも目標が無さすぎた感がある。52年度は、もっとマクロ的な目標をもって例会、合宿等を計画する。

昭和52年度冬山合宿報告

は　じ　め　に

鹿島槍の東面に入り乍ら深雪のラッセルに喘ぐこともなく、特に厳しい冬山の条件下での行動もし得なかった。天狗尾根についても上部の核心部には一歩も踏み入ることもできなかった。然し、天狗の鼻から下部についても二つのクーロアールを含み、可なりの急峻さを持ち味わえるものがあったことと思う。

計画については多勢で楽しくやりたい。また、冬山らしい厳しさをも求めるという考えから参加者の決定等が遅れるなど、各担当者には苛立ちの中に時を過ごさせるなど迷惑をかけたところです。

合宿中に於ても参加者の中には、意欲ほどに行動できず物足りなさ等があったかも知れない。そういった色々な面で充分な反省を行い、内容のある報告書を整える積りであったが、諸事都合により以下の報告を納めることに致しました。

合　宿　計　画

合宿の目的

鹿島槍ケ岳、天狗尾根からの登頂

期　　間

１２月３０日～　１月７日

行動予定

第１日目　　大町駅―― 鹿島部落――天狗尾根１９００m付近C_1

第２日目　　C_1――天狗の鼻ＢＣ設営

第３日目　　ＢＣ ―― 頂上 ――ＢＣ

第４日目　　ＢＣ撤収 ――大町 ―― 帰神

第５日目
第６日目　　予備日
第７日目

但し、予備日については入山、ＢＣ設営に３日を要した場合は予備日を削る。

悪天候で回復の見込みが無いと判断したときは、予備日を消化せず下山することもある。

参　加　者

梅原慶彦（Ｌ）宮本朋之（ＳＬ）田中正裕（装備）星野辰也（食料・会計）野上哲男（記録）星

加弘之（気象）内藤正司（装備指導）野上芳宏（食料指導）野上博司、岸本光弘

食料計画

行動日は４日または５日として計画。即ちＢＣ設営が２日でできれば、１日分の朝食、昼食は兼用の停滞食に変える。

朝食４回分。昼食４回分。夕食６回分。及び停滞用の朝、昼兼用食２日分。米１人７合。

行　動　記　録

野　上　哲　男

１２月３１日（雪）

大町駅６：１５－鹿島部落６：４０－大谷原７：５０－荒沢出合１０：３０－天狗尾根稜線C_1　１４：００

駅の外はまだ暗い。チャーターしてあった大型バスに楽々１０人乗って車中、各自スパッツを着けたり色々と身仕度をする。約３０分で鹿島部落に着く。ここから薄明るくなった自動車道を行くと大谷原である。雪の降る中で朝食をとる。大川沢からは先行パーティーのトレースは完全に雪で覆れ歩きづらい。何度か渡渉をしながら黙々と荒沢出合を目差して進む。荒沢出合からアイゼンを着け、ブナ林の急登を喘ぎながら登り稜線に出る。１８００米辺りに１張りテントがあった。これより１００米程度高度を稼いだ所でテントを設営する。

１月１日（雪）

天狗尾根稜線１９００米$C_1$８：００－第１クーロアール取付８：５５－第２クーロアール取付　１０：００－天狗の鼻１１：１５

雪がしんしんと降る中を出発。尾根はだんだんと痩せていき、きつい登りに変る。汗と降雪で身体は内も外も濡れ放題である。やがて第１クーロアールに取付く。他のパーティーがフィックスしていたので、それを借り全員ブルージックで慎重にステップを利かせて登る。然し、クーロアールを登った後ホッとしてはいけない。雪は想像以上に積っていて、痩せた尾根も両サイドに雪庇が張り出しているので騙され易いものだ。第２クーロアールは下山するパーティーのため少し待ったが、リーダーは痺れをきらせてＧＯのサイン。ザイルなしで不安定なステップの跡を、一歩一歩慎重に登る。一息入れる間もなく登りはだんだんきつく雪壁のようになる。いいかげん脚が疲れを感じたとき、先行者の姿が消えた所でクーロアールは終り、すぐそこが天狗の鼻である。

１月２日（雪）　停滞

前夜の天気図は西高東低の冬型気圧配置で山は荒れ模様。アタックは無理をしないで、今日は停

滞である。一日中、食って食って体力を養う。

夜、月が傘を被り束の間の晴れ間に出合う。荒沢南壁の黒々とした岩壁が月明りに浮んで、その全貌を見ることができた。これは、日本海にあった弱い低気圧の所為か。明日の行動をどうとるかリーダー判断に迷うが、夜１０時の天気図をとった結果、当分、良くなる見込みがないのでアタックは諦め下山することに決めた。

１月３日（雪）

下山出発９：００ーテント場に戻る９：２０ー再度テント設営１０：３０

下山する可くテントを撤収して下って行こうとしたが、急に吹雪となり視界がゼロとなる場合もある。また、前夜からの降雪でトレースも殆んど消え、雪崩の危険も感じられるのでリーダーはバックの判断を下す。

テント場に戻り、幸いデポしていた食料を堀り出したが、石油は殆んど捨てたので３リットルあるだけだった。燃料は節約して使わねばならない。停滞することは苦痛にならない。即席の将棋を作ったり、色々とやることは豊富である。今夜の釜飯は何故かこの合宿で一番美味しく感じた。

ＰＭ６：３０皆んな濡れたシュラフに入り寝る。うとうとしていると荒沢の方で、地鳴りのような雪崩の音がゴーゴーと長く聞こえていた。

１月４日（雪）停滞

吹雪は徐々に治まり、昼前には視界もよく山里の部落も見えるようになった。昼、甘納豆でぜんざいを作る。餅は１人１個づつで、残りは“アミダ”で分ける。

夜、小ポンで外に出ると暗闇の中に、大町の街の灯がぼんやりと浮んで見えた。明日は下山できそうな感じである。

１月５日（雪）

天狗の鼻７：２０ー第２クーロアール下８：１５ー第１クーロアール下９：００ー荒沢出合１０：３０ー大谷原１１：５０ー鹿島部落１３：００

小雪の降る中を下山開始。視界は１００米ぐらい。新雪でトレースは消え、天狗の鼻から第２クーロアール迄の斜面は新雪がのっぺり積り、不気味な感じである。内藤トップでラッセルし乍ら下る。森林帯に入れば第２クーロアール。フィックスしてあった６㎜ぐらいのロープにシュリンゲを通して下る。先頭の２人がスリップし、危ない所で木をつかんで難を逃れる。全員後向きの姿勢で一歩一歩慎重に下る。これより、第１クーロアール迄の所々、大きく雪庇の張り出した痩尾根をトレースして行き、第１クーロアールも難なく下降し、入山日に苦労して登った荒沢出合までの急登を一気に下った。

食料係として

星野辰也

計画の段階

今回の合宿は天狗の鼻にＢＣを設置の上、鹿島槍頂上アタックという形式をとったため、食料計画もそれに準じ行動日を４日（ＢＣ設置まで２日、アタック１日、撤収下山１日）行動予備日１日それに停滞予備日２日、都合予備日３日の計７日間として計画した。

初め合宿参加人員が１４名ということから１つのテントでの調理が不可能で、７名づつの二分割方式として、テント毎に独立して調理できるよう、各献立に必要な材料はもちろん調味料等も全て二分割して計画したが、最終的に参加１０名となったので一括して調理することにした。

梱包は各献立毎に梱包し、調味料、間食等は別梱包とした。行動食は入山前に各個人に分配し、過不足及び好みにより追加、削除は自由とした。非常食は各自の好みに合わせて２食分を持参してもらうこととした。

実施及び反省

今回はＢＣ食が主となるため、重量については特に考慮せず主に食べ易いもの、ボリュームの十分にあるもの、正月山行に相応しいものとして餅、汁物を多く取り入れ、野菜類は全て生鮮とし、具についても標準の約１．５倍の量とした。このため、一部の行動食を含めた食料の重量は約４５Kgとなったが、今回の山行形式に対しては、特に重過ぎたとは思わない。各献立の含有カロリーは特にそれが不足していると思わなかったのと煩雑さから計算は行なわなかったが、一応はやっておく可きであったと思う。

先輩のアドバイスにより、自分としては初めて停滞食を計画しましたが、お好み焼は大変好評であった。今後もこれに準じたものを取入れると良いと思う。

調理に於て、特に味付けは体操競技のフィニッシュと同じで、料理を生かすも殺すもこれによって決まるため、全面的に先輩の指示（舌）に頼ったが、私達も登山技術の一部として、また、文明の重要なファクターとしての食事ということに日々、留意することによりこのお山の味付け技術の向上に努めたいと思います。調理及び味付けはその人の創造性の豊かさを示すものだと感じました。

行動食、非常食

今回も合宿前に色々試食してみたが、結局従来通りあまり冴えないものになって残念であった。まあまあだったのは焼ブタ、干リンゴ、ゼリー、固形ハチミツぐらいだったと思う。行動食は各自の好みにかなり相違があり、また、金額的にも大きなウェートを占めるため、もっと改善されるべきであるが、市販品に頼ることから自ら制限があると思う。

そ　の　他

今回、酒類を食料の一部として組み入れたが、その適量の個人的相違か、本来の主旨からかその量的不足により一部に禁断症状を起した方があったと思うが、これも致し方ないことだと思う。人はそのものの不足によって初めて真価を見出すものと思うこととして反省に替えさせて頂く。

食料係指導として

野　上　芳　宏

食料係の星野君が早くから非常に熱心にやっていたので、僕としては殆んどすることがなかった。

合宿中、何が楽しみかというと、食事ほど楽しみなことはないのではないか。それで、重荷にならず"少しでもうまい物"を重点に計画した。

一つの献立に生野菜を少し入れることによって、非常に味が良くなった。停滞食のお好み焼にもう少し豚肉が欲しかった。

装備係として

内　藤　正　司

計画の段階

先ず参加人数の決定がなかなかされずイライラした。一人の増減によりテント、炊事用具、石油の量など色々変ってくる。

ザイルの数について、コンテニアンスかフイックスするか。コンテニアンスで行く場合、トップで行ける者の数が問題になる。フイックスの場合ザイルの数は少なくて済む。結果、フイックスして行くことにした。

装備は最少限に押え、全般的にはより装備の軽量を計り、行動をスムーズにすることを主眼とした。

山行実施の段階

炊事その他細かい物については何不足、不自由はなかった。唯一つ、ザイルの問題が起きた。鹿島槍、天狗尾根の概要、文献を調べた積りだったが、余りにも軽く考え過ぎていた。まあ、無事に下山できたが、もっと慎重に考えねば事故の元になると深く反省しています。

パーティー全体の技術面についてよく把握しているはずだったが。それと、積雪状態、風、視界など全ゆる自然条件も考える可きだった。一つの失敗が大きなものに成ることを身にしみて感じた。

感　　想

野　上　芳　宏

何はともあれ天候には勝てないが、登頂できなかったのは心残りだった。また、一度も鹿島槍ケ岳の姿を見せてくれなかったのも残念である。日数の余裕さえあれば、もう３～４日は天狗の鼻でねばり、登頂して帰りたかった。口では「来年もあるさ」なんていうものの、秋からの冬山へのトレーニングは大変だ。（勿論、目的があって楽しいが）

朝は早く起きて高取山へ登ってくる。例会はできるだけ出席する。また、六甲全山縦走も、みんな冬の鹿島槍合宿のトレーニングだった。夜、寝る時の布団はできるだけ薄く着て眠る。そして、一番気を使うのは身体のコンディションだ。風邪をひかないようにするのに、なかなかの神経を使うものだ。

こうして、漸く準備会の日がくるのであるから、そう簡単に冬山へは入れないものである。だから、今度の合宿で１月３日の朝、テントを撤収して下山しかけたが、降雪中でもあり、行動することにあんまり気が進まなかったし、また、そう簡単に山とサヨナラはしたくなかった。

僕には鹿島槍の天狗ノ鼻に居ること、大自然の中に居ることが嬉しく、吹雪のためテントがバタバタと音をたてることさえ楽しいものである。停滞日は一日中何もせず、食べることとポン打ちのことのみ考えていたら良いなんて町ではできぬのではないか。

この合宿では天候が悪く登頂できなかったが、山の中でテント生活をすることで結構よい経験になり、次の山行、合宿のため役に立つと僕は思っている。

感　　想

野　上　博　司

計画の段階

合宿の良し悪しは、計画及びそのためのトレーニングが如何に充実していたかによって言われていますが、私も同感です。

今回の場合は１０月、１１月と合宿に対する会員の雰囲気が盛り上り大変良かったが、１２月に入り一部個人的な事情に依り合宿に参加できない者や、身体の調子をくずした者が出て残念でした。私個人も旧い傷の脚の膝を痛め、最後まで合宿参加に対して迷いました。また、風邪にもかかり身体の管理が不十分だったことに対し反省をしています。

全般を通じてＯＢも若い人もよくまとまって、合宿に対して準備ができたと判断しています。

実施の段陥

リーダー以下現役メンバーによく頑張ってもらったが、相手の自然には逆えず登頂できなかったのは止むを得ないことと考えます。

今回の合宿のメンバー構成が年輩の者が多いためか慎重であったと思う。

天狗の鼻から1月3日に撤収して下山しかけたが、再び元に戻りテントを設営したことの良し悪しでは、結果的に今考えてもあれで良かったと判断します。今後の教訓として石油や食料を放棄する場合は、十分爾後のことを検討し慎重に行うべきであることを痛切に感じました。

その他合宿全般を通じて

私個人としてはＯＢとして非常に保護を受けた（共同装備なし）ことについては大変嬉しくもあり淋しくもありました。これは脚の故障もあったためかと思いますが、皆に迷惑をかけない程度は体力の養成を是非必要と思います。

天狗尾根については大変良い山だと思います。是非、3月頃の山行で行きたいと思います。

合宿の感想と反省

内藤正司

(1) 計画の段階で、リーダーから合宿の目的を指示されていなかった。ただ、天狗尾根より頂上をアタックするということだけだった。それも良かろうが、この山行をステップにして、一歩前進するものがなければ合宿の意義がないと思った。合宿をもう一度考え直すことも必要だ。

(2) メンバー決定が遅すぎた。だらだらとした面が大きなマイナスになっているようだ。

(3) 合宿のリーダーシップとメンバーシップ、それにＯＢとやらの立場をはっきりさせなければ、一つのパーティーがバラバラになる恐れがあると感じた。あくまでも、リーダーを作り上げるための合宿である。これによってリーダーの自信ができ上り、より目的のある山行を押し進められるのではないか。

(4) リーダーになる以上、あらゆることに於ても覚悟して判断し、メンバーを引っぱっていく強い意志が必要だと感じた。

わたし自身、この体験を良い教えとして、もっと考え直さねばならないことを多く発見した。

感　　想

星　野　辰　也

今回の合宿は登頂こそできなかったが、自分としては学ぶところの多い合宿であったと思います。

合宿に参加するメンバーですが、計画の十分進んだ段階に於て各自の都合もあると思いますが、少なくとも合宿に参加希望する場合は日常生活に十分留意し、極力、参加できなくなることがないようすべきだと思います。

今回は入山前の１２月２６日頃より大寒波が到来し、１月７日頃まで日本を襲うという、まさに冬山の実態を見せつけられた。基本的な西高東低型の中で、日々変化する気圧配置に自分の山岳気象知識の不足、山の天気の難かしさを新らためて知らされました。また、こういう状況での行動判断及びそれを実行する技術の不足等を思い、今年度の鹿島槍周辺に於ける遭難を考えるに、冬山とはかくも厳しく、また、それ故に素晴らしいものだとつくづく感じました。

冬山に限らず山での危険は各パーティー、各メンバーを問わず皆んな同一であり、風雪もある者にとっては当り前のことかも知れませんが、今回の私にとっては荒沢出合付近まで下山するまで不安な日々でした。

しかし、月明りの中で見た荒沢の奥壁、北壁の雄姿は、下界においては絶対に得られぬ感動を与えてくれました。今、思うことは再度天狗尾根に行き鹿島槍に登頂したいということです。

下山後、何気なく読んだ井上靖の作品「あした来る人」の中に鹿島部落で休憩した家のことが書かれてあり驚きました。

この合宿で得たもの

野　上　博　司

◎シュラフで現在、使っているモンクレイのシュラフが薄くなり寒いために、半シュラフを中に入れて二重にして使用したのは良かった。但し、いつも使用しているシュラフカバーは使用しなかった。

◎テント生活で小便の処置を考えてテントを作ると面白いと思う。また、完全なビニール袋の利用も悪くないと思う。

◎テントの中で、コンロの周辺にウレタンを敷いたが、それでテント中央部が沈まず衛生的で大変良かった。

合　宿　余　話

内　藤　正　司

入山日から雪が降り続き、C_1（１泊目）のテントの頃はK君の歌も「北の宿」の〝雪がしんしん降ってます〟なんて呑気に歌っていたのが、３日、４日と停滞が続くとK君の歌も、題名は知らないが〝これっきり、これっきり、これっきりですか〟なんて変ってくるから面白い。

今度の合宿は停滞日が多かったため食料はよく食った。ある１日分を紹介すると、先ず朝起きてお粥・粕汁、お好み焼（１人３枚半）、焼豚入野菜炒め（その間雪割りウイスキー数ハイ）、ラーメン、昆布入りスマシ、ポップコーン、餅入りシチュウ。夕食にクリームシチュウ・メザシ。これが食べ終ると夜になった。

今回の合宿は１０名。テントはツリテンとカマテンと二張りだった。ツリテンで２名寝ていたが、寒いのと２人別のテントは寂しいのでカマテンで１０名寝ることにした。５人づつ入口側頭と奥頭に、足を交互にし全員が寝る迄の時間は大分かかった。おまけに、足を早く入れなくては自分の足の置き場がないのでぐずぐずしておれない。足は１本づつ上下にして場所をとらないようにした。

皆さん、カマテンで１０人寝たのは今回が初めてではないですか。狭い乍ら楽しいわがテント。

最　後　に

梅　原　慶　彦

長い間冬山合宿から遠去かっていた私をリーダーに合宿することは、私自身疑問もあり問題のあるところだったと思います。

リーダーがメンバーの大半と積雪期の山行を伴にしたことが無く、全員の技量を把握できてないため不適格な指示等を行ったこともあったと思っています。それでも、全員が非常に献心的に協力してくれたので、無事に合宿を行うことができたことと思っています。

雪上生活技術について個々に工夫され、可成り卓越した技術を身につけていると感じた。

一度ＢＣを撤収して下山をはじめ、また引返したことについては、メンバー各々に判断についての考えがあることと思う。どちらが正しかったかは結果論からしか言えないし、同時に二通りのことを行えない。現役メンバーにはこの経験を、将来の山行に生かして頂ければと思っています。

個　人　山　行

阿弥陀岳南稜

星　野　辰　也

昭和５２年２月１１～１２日　メンバー　　三浦、星野

１０日の大阪駅は信州方面に出かけるスキー客でごった返していた。国鉄の運賃値上げもこれら独身貴族にはたいした影響を与えないようである。混雑した列車で、混雑した宿に泊り、混雑したゲレンデで滑るのである。“日本人て不思議だなあ„　我々は仕方なしに車掌さんと共存することにしてまずは車中での存在位置を確保した。

２月１１日　快晴

茅野駅にて下車すると今度は八ケ岳に向う登山者で待合い室はいっぱいである。しかしまあ南稜方面へ行く者は少ないだろうと勝手に思いまずはソバで腹拵を済ませ、タクシーにて学林まで入る。（料金は2,１２０円也）。途中白銀にかがやく蓼科・霧ケ峰・南ア等に朝の御挨拶をしているとようやく山へ来たという気分になって来る。学林にて下車すると予想に反して３～４パーティーがおり、広河原沢か南稜へ行くものと思われる。積雪量も非常に少なく、一昨年の御小屋尾根のようなラッセルはなさそうである。八ケ岳の積雪量はむしろ２月下旬から３月にかけての方が多いのかも知れぬ。一服してのち落葉松林の林道を南稜へと向う。約２時間程で視界がひらけ広河沢奥壁、南稜等が望まれるところに出た。ここから立場川沿いに旭小屋へ向うよりは広河原沿いに林道を進み旭小屋北の南稜末端のコルに直接登った方が近いので後者を行くことにする。稜線に出ると先人のトレースと積雪量の少なさから、入山前に懸念していたラッセルはしなくて済みそうである。樹林帯を進むうちにようやく立場山に到達する。ここからみる広河沢奥壁は立派なものである。立場山を少し下り無名峰との中間のコルにテントを設営し、まだ高い午後の日ざしにテントの中でしばしまどろむ。２人でさっと夕食を済ませ、昨夜の大阪駅と茅野駅との状況より判断し、明日は赤岳の登頂はやめて阿弥陀より一気に下山することに決め、星空の中に夢みる人となる。

２月１２日　快晴

夜中に寒さで目をさます。まだＡＭ１：３０であるがストーブで暖をとる為シュラフより出る。朝食を鳥肉入りラーメンで済ませヘッドランプと月の明りを頼りに阿弥陀岳を目指す。無名峰より尾根は大きく左に折れており、これよりP_1，P_2と進む。クラストした雪は快適でありしばらくしてP_3の基部に着く。時間はまだＡＭ５：００である。佐久側は雲海で雲の上に富士の姿がみられる。ここで明るくなるまで吊天をかぶり１時間程待つ。P_3はリッジにはまったく雪はなく夏と

同じである。しかし岩はもろそうであるしあまり登る気はしない。権現岳・富士山の姿がはっきりしてきたので、登攀準備をしコンテで3ルンゼまでトラバースする。ルンゼも雪は少なくよくしまっておりアイゼンがよくきく。コンテで３０ｍあまり登り岳樺のあるところより左よりになお２０ｍ程登るとＰ$_3$の頭に出る。途中２ケ所ほどいやな所があったがあっ気なかった。これよりＰ$_4$に向うがザイルと登攀用具はじゃまになるのでザックにしまうことにする。Ｐ$_4$は広河原沿いに少しトラバースしてルンゼ状のところを登ると阿弥陀の頂上である。例によって３６０°のパノラマでありもちろん我が故郷の山々も望まれる。お地蔵さんに挨拶をしていると、女の子がチョコチョコと１人で登ってくる。東京から何度目（？）かの誕生日を山で迎える為に１人で来たそうである。２人で来る予定であったが都合で１人で来たそうである。相手は男性か女性か聞くのは忘れた。山頂よりコルまでは３人で降り、コルより行者小屋まではふうふういって登って来る人を尻目に一気に尻セードで下る。小屋の廻りはテントで一杯である。みな本日の行動の準備中のなか我々はアイゼンをはずし下山の用意である。大同心は雪はほとんど付いていず、案外簡単に登れそうである。むしろ阿弥陀の北壁の方が大変であろう。美濃戸口まではだらだらした下りである。時間待ちで塩尻駅前で大変に美味しいそばを食べ予想通りすいているしなの号にて帰神する。

（時間）２月１１日　茅野ー学林（９：００）ー南稜末端コル（１２：００）ー立場山（１４：００）ー幕営地（１４：２０）

２月１２日　起床（１：３０）ー幕営地（３：３０）ーＰ$_3$基部（５：００）ー阿弥陀岳頂上（７：００）ー行者小屋（８：１０）ー美濃戸口（１０：００）

滑川本谷中央稜

星野辰也

昭和５２年３月１９日～２１日　パーティー　三浦、星野

２月の阿弥陀岳南稜以後次のステップとして中ア宝剣岳周辺を目標とする。登攀対象はアプローチ及び高度差の最も長い（800ｍ）中央稜を選んだ。連休にもかかわらず、滑川を遡行したのは我我だけであり静かな山行であった。

３月１９日　曇

大阪発（８：３０）ー木曾福島（１２：４０）ー上松二合目（１３：４５）ー敬神小屋（14：05）ー三ノ沢出合（１６：１５）ーＡ$_1$・Ａ$_2$中間点（１７：００）

昼間の特急にて木曾福島に着く。タクシーにて上松二合目に向う。周辺の山々の雪は少なく二合目附近にはまったくなくワカンは不要なので木の下に隠して出発する。敬神小屋より少し登ったところより上松道と分れ滑川へと進む。川原は１ｍ程度の積雪で気温が高い為か雪が腐り消耗する。

谷間から見える宝剣岳西面の岩稜になぐさめられA_1，A_2の中間点附近まで進み、ガスも出て来たので明日の天気を気にしながら大きな岩の上に吊天を張る。岩の下に5m程の氷があったのでちょっとウォーミングアップを行なったがアイスバイルは氷壁には不向のようである。

3月20日　晴

起床（4：00）－出発（6：00）－A_2（6：30）－中央稜取付（8：30～9：10）－P_1（12：40）－P_3（17：15）－P_4，P_5の中間テラス（18：10）

気温はぐんぐん下り満天の星である。日頃の行ないのよさを新らためて感じる次第である。雪も昨夜からの気温の低下でよく締っており、左右の沢筋より発生した雪崩のデブリの上を一路中央稜へと進む。途中奥三ノ沢出合のF_1，F_2各40m程のブルーアイスは素晴らしい眺めであった。四ノ沢、前岳沢出合と進み、やがて中央稜末端に着く。出合の本岳沢側のデブリの上で登攀準備をし、ピッケル・バイル・出歯アイゼンで左ルンゼを150m程度攀り、20mの氷瀑の左端を登り急な雪壁のルンゼをP_1の左稜へと80m左上する。ここからP_1までは本岳沢側を腐った雪に苦しめられる。P_1からコルへはジャングルジムみたいなブッシュの間を下る。コルよりP_2まではハイマツとタケカンバの多い雪稜を三ノ沢岳，極楽尾根等を望みながら登る。気温は午後になってもあまり上がらず雪の状態はよい。P_2よりP_3へは大きな岩の右を宝剣沢側の急峻な雪壁を100m程トラバースしてP_3の頭に出る。このトラバースは悪い。P_3からコルへの下降は宝剣沢側の雪庇を下降しコルよりナイフリッジをP_4へと登る。P_4とP_5の間の快適なテラスにて設営。夕焼けがとても美しい。

3月21日　快晴

起床（3：15）－出発（5：40）－宮田小屋（6：20）－宝剣岳（6：45）－宮田小屋（8：00）－玉の窪（9：00）－敬神小屋（11：50）－二合目（12：20）－帰神

移動高の為か朝方の気温はよく下がって雪の状態はよくバイルとピッケルのコンビネーションでP_5，P_6と岩稜・ナイフリッジ・雪壁と快適に登りP_7へ出る。記念撮影の後宮田小屋へ、小休の後登攀用具をはずし宝剣岳へ散歩に行く。帰路は例の上松道である。玉の窪へは夏道のトラバースを下ったが本岳沢にスッパリ切れておりあまり気分のよいものではなかった。上松道は4合目あたりから雪はなくアイゼンをはずす。しかし凍結した道に足をとられながら敬神小屋に着く。

3 月 の 奥 美 濃

昭和５２年３月２２日～２８日　　神 田 章 吉

奥美濃の山、夏はブッシュでおおわれているけれども、積雪期になると歩きやすくなる。

そんな山に、１人のこのこと出かけて行きました。

山は最初から雨を降らせ、ぼくをふるえさせます。

「おお　チベタイ、チベタイ」と雪庇にもぐりこみ、テントをはります。

能郷白山のピークにつきました。

やぐらに１本の赤ハタが、なお残っています。

ガス　ガス　ガス、アイゼンこのまま、強風にケツをけとばされながら、走るように下ります。

広い、白い雪原、樹木も雪の中に冷たく、静かにねむっていて、起きそうもない。

ぼくは、ガスの中を、地図と、地磁で歩きつづけます。

後ろをふり返ると、ワカンのトレースが、さびしそうに、でも力強く沈んでいます。

心が、しんしんとしてきます。耳に入るのは遠くの風の音。

くそ、いまいましい冠山め。

そうかんたんにおちてたまるか。岩でゴツゴツしたこの山域では数少ない山。

急傾斜なのと、雪が少ないのとで、ぼくは、四つんばいになってへばりつく。

ピークから南側は断崖で、ついつい足に力が入る。

金草山ののぼりはけっこうあるし、両側が切れています。

時々、雪の裂け目に落ちこみます。

一度、体ごとすっぽり入ってしまい、めんどくさいからそのままで、写真をとったりして休みました。

青空がまぶしくて、ねむいです。

雪もくさってきました。旅もそろそろ終わりに近ずいたようです。

雪の斜面をかけ下ると、土が露出していました。

そこは、高倉峠でした。

北鎌尾根～槍・穂高縦走

昭和５２年４月２９日～５月３日　　星野辰也

パーティー　星野、神田

４／２９　曇のち雪　大町（６：１８）－葛温泉（６：４５）－濁沢（８：２０）－東沢出合（９：００）－湯俣（１１：１０）－千天出合（１３：１５）

松本までの指定券による夜汽車は快適であったが、くろよんの混雑にはいつものことながらいやになったので少々時間は遅くなるが新宿発のアルプス８号に乗り換えることにした。大町－葛温泉間はタクシー利用。葛温泉に着くとザックの山である。みな申し合わせたようにヘルメットとザイルを持っているところをみると北鎌へ行くらしい。我々はヘルメットを持ってこなかったので土建屋のヘルメットを借りて東沢出合までのトラック便にザックの搬送を依頼して腰弁当でテクテクと歩く。７年程前にここを通った時とは大部様子が変っている。そのうち東沢出合までタクシーで入れるようになるだろう。道路幅などは一級国道並みである。

東沢出合にてザックを受け取り、小休の後湯俣へと向う。湯俣で昼食を済ませ昼寝でもしたい気分だが、本日の千天出合の混雑を予想するとあまりノンビリ出来ない。湯俣からは道は一変して、今までと逆に水俣川の左岸通しに進む。途中のへつりなどはさして困難ではないが下を流れる水の冷たさを考えるとあまり気分のよいものではない。他パーティが手間取っているので一服する。

千天出合の手前よりチラチラと雪が舞って来た。出合より５０ｍ程天上沢側に行った所で設営する。それ以上進んだところでは設営可能な場所は取付の吊橋を渡った所までない。大変おいしい夕食を済ませ、時間は少々早いが谷間なのでラジオもよく入らず明日の事を考え１８：００シュラフに入る。

４／３０　晴　千天出合（４：４０）－P_2（６：３５）－P_4（７：４５）－北鎌のコル（９：０５）－P_8（１０：００）－独標（１１：１５）－北鎌平（１３：４５）－槍ケ岳（15：00）－テント場（１６：００）

起床２：３０、昨日よりの雪も夜半に上がり５㎝程積った。朝食のメニューを聞いてびっくり！そもそもメニューなどないらしい。たまたま小生がおかずの足しに持って来たカツオ風味で誤魔化して、空が明るくなり出した頃出発する。他のテントはみなやっと起き出したというところだ。

積雪も0.5～１ｍ程あり新雪も降った後なので出合よりアイゼンを付ける。出合より５００ｍ程行った所で非常に簡素な吊橋を渡る。ここよりP_2への急登が始まる。途中４０ｍ程の岩場らしき所に腐りかけたフィックスがあったがなんなく登れた。P_2よりP_3・P_4と問題なく登る。ここからの硫黄尾根の眺めは迫力がある。

P_4より一度コルへ下降してP_5は天上沢側よりクロワール状の所を登りこれよりP_6との間に出て、P_6・P_7は千丈沢側より登る。P_7より北鎌のコルへ下降する。見ると北鎌沢の雪壁を登って来るパーティーがいる。天上沢からは６００m程の急登なのでかなりしんどそうである。コルより雪壁、岩稜を一路P_8へと進む。前日より風邪気味なので頭がくらくらする。P_8より前方に大きく独標が望まれる。取付まで一度下降してステップをたどりダイレクトに独標の頭へ登る。ここまで来ると、表銀座、裏銀座の各山々と同等の高さとなり、又前方には槍の穂先が大きく望まれ、まさにアルペンムードを満喫出来る。ここより北鎌平まで小さなピークを上下しながら岩稜・雪稜を主に千丈沢側沿いに進む。１３：４５北鎌平に着く。本日はここに設営してもよいのだが、まだ時間も早いことだし、本日中に槍を越えてしまうことにする。ここよりザイルを出して天上沢側より雪壁をコンテで進み、クロワール状の不安定な雪壁を登るとヒョッコリ祠のところへ出る。

頂上は１０名程おりほとんどが北鎌より登頂して来た者で一般ルートよりの者は少なく割と静かであった。３６０度の展望を満喫した後、下降し槍ケ岳山荘より少し南側へ行った所に設営する。

５／１　快晴　幕営地（９：００）－南岳（１０：３０）－北穂高岳（１４：００）－白出乗越（１６：２０）

起床７：００、本日は北穂までの予定なのでノンビリすることにする。南岳までは前日とまったく異なったハイキングコースであり廻りの眺望を楽しみながら散歩気分で行く。南岳よりキレットへの下降は滝谷を眺めながら岩稜とガレ場の道である。キレットは飛騨側を行く。飛騨泣きあたりより滝谷のクラック尾根を登攀中のパーティーが望まれる。他に登攀中のパーティーはいず静かなものである。北穂へは信州側の雪壁を８０m程登ると雪に埋もれた北穂小屋へと出る。逆コースを取る場合状態によってはかなり悪場となるところがあった。山頂より西の空をみるとレンズ雲もみられ晴天も本日までという感じであるので本日中に白出乗越まで行くことにする。途中四尾根を登っているパーティーがみられたが四尾根は半分ぐらいは雪稜であるがあまり困難とは思えない。又ドームやP_1，P_2フランケは夏と同じ状態である。岩稜を下ったり登ったりしながら涸沢岳頂上へ出ると風も強くなって来た。白出乗越に着いた時はかなり風が強くなったので、吊天を完全に囲うようにブロックを設置することにする。テントは６張である。３０分程でやっとブロックの壁が出来上る。これで安心である。明日はきっと停滞であろう。

５／２　雨

昨夜よりやはり雨となった。予定のコースの８割がた終えたので気分的に楽である。しかし一昨年の槍平のようにならねばよいが！　天気図によれば雨は本日中に上がりそうである。他のテントは半分は避難小屋へ逃げ込んでいる。しかしながら誇りたかきアルピニストも水も滴るいい男となっては寝れたものではない。

5／3　曇のち晴　白出乗越（７：３０）ー奥穂高岳（８：００）ー白出乗越（８：３０）ー涸沢（９：２０～１０：００）ー横尾（１１：３０～１２：３０）ー上高地（１５：００）ー松本

夜半より雨も上がり気温がグングン下がり、濡れたシュラフに入っているより起きていた方がましである。風はあい変らず強く稜線はアイスバーンになっているだろう。西穂までの予定だが気が進まないので奥穂を往復してザイテングラードを下降することにする。奥穂へのルートは登山者で一杯である。特にザイテンは人がつながっている。予感が適中したのかやはり稜線で滑落者があったとのことである。本日中だけでも穂高山系で５名の命が失なわれている。横尾で野上さんらを待ったがもう下山したのかも知れないと思い上高地へと向う。上高地より松本まではタクシーで１人1,４００円也。松本城はまだビールの季節には早すぎました。

裏銀座　春山記録

４月２９日～５月３日　　田　中　正　裕

４月２８日　　参加者　野上芳、野上博、金田、数野、相馬、田中

大阪駅で星野さん、神田さんに出逢う。両氏も目的の北鎌～穂高の縦走に向って行った。列車は予想以上にすいており、十分とは言えないが睡眠をとることができた。

４月２９日

駅に着く、あてにしていた工事用のトラックに便乗することが出来なく、仕方なしに駅を７時に出発、トボトボと有峰湖を目ざして歩く、途中で北陸電力の車に乗せてもらい。徒歩時間として約２時間位を短縮することが出来た。「北陸電力様は神様です。」そして、また一路有峰湖を目ざす。有峰湖が見えるころからブルドーザーが除雪作業をしており、そこから先は雪道である。待望の有峰湖に１２時にやっと着く、少しだがミゾレが降り出してくる。雷が遠い空で３発とどろく。川の所から折立峠のトンネルが向うの上の方に見えるので近道をして直接谷から這いあがる。　折立峠１４時２０分に着く。前に聞いた３発のとどろきは、雪国で言う「雪おこし」であったのか？　先ほどから降り続いていたミゾレは雪に変り春の締った雪の上に１０㎝位積り、木には新雪が乗り、冬さながらの風景である。折立平小屋１４時２０分、営林署の建設中の小屋らしい。中には冬期に使用されたと思われる多くの食料やコンロがあった。ここで我々も一宿をこの小屋で過ごさせてもらった。「居住性バッグン！」

４月３０日

折立平７時３０分に出発する。快晴なり。小屋を一歩出ると昨夜の雪が朝日に輝き、ひじょうにきれいである。雪は良く締まり、どんどん高度を上げていく。太郎山への登りの雪原は気持ち良く

広がり、大きな薬師岳を目前に、はるか向うの方には剣岳が浮んで見え、白山もくっきり見える。雲ひとつない。太郎小屋へ寄らずに斜めに太郎山へ登る。太郎山１３時２０分通過して、15時20分に上ノ岳山頂へ着く、時間が時間なので、ここに幕営することにする。雷島がテントを張るそばでウロウロするので、まずは雷島の撮影会。上ノ岳山頂に張ったテントはすばらしく気持ちがいい。陽が暮れると富山の灯が見えだす、ほとんど風がなく、山全体が明るい、それもそのはず、月はほぼ満月に近い状態で照っている。

5月1日

5時３０分　上ノ岳出発、うれしいことにまた快晴也「ウッシシ」「ああーまぶしいなぁ」夜はだいぶん冷えたらしく、雪がひじょうに締って歩きやすい。アイゼンを利かしてどんどんと進む。中俣乗越６時４０分通過。黒部五郎岳への登りはひじょうにアイゼンが利き登りやすいが、１ピッチではつらい、２ピッチで登りきる。時間の短縮の為、五郎岳のカールを中央の岩を目がけて直下する。ひじょうな急斜面である。すれちがったスキーをかついだツアーの２人はこの急登をあえぎながら登っていた。黒部五郎岳８時２０分、カール８時５５分、カール中央の岩から尾根をトラバースするが、カールだけに日当りがいいのか、雪が腐り、アイゼンがすごくダンゴになり、高ゲタを履いているみたい。黒部乗越小屋１０時、昼食を取り三俣蓮華岳の登りに備える。三俣蓮華岳山頂１２時４０分、いい天気で「気分上上也」。山頂からは太郎で見た槍より一歩近ずいて見える。「だいぶん歩いてきたなぁ」と実感する。１４時３０分、双六山荘に着く、風がひじょうに強い、小屋の前に天幕を設営する。夜中になって風は一層強くなり雨も加わる。うとうとしたころ、水しぶきで起される。ヘットライトで照らすと、みんなのシュラフはベトベトで、テントは風でたわみ、サイドのポールがすぐにはずれてしまう。テントの中でおのおのカッパを着たり傘をさして風と戦うが、小屋に逃げ込む。小屋の中は天国である。小屋のおやじさんは、レン炭をおこしてくれ、温まりながら熱いお茶をよばれた。

5月2日　沈殿　暴風雨也

どうも今日はおさまりそうでないので小屋でのんびり休み、食料の残り物を全部入れてカス汁を食べる、シャケ入りの……。今日は本来ならば、槍から上高地に向っている予定であるが、この沈殿によって仕事の関係で日数がたらなくなり、金田さん、野上博さんの両氏は双六山荘より直接に新穂高へ降りることになった。残りの野上芳宏さん、数野さん、相馬さん、田中は明日の天候が良くなれば予定どうり進むことになった。高気圧の動きが速いので明日の回復に期待をする。

5月3日　曇り也

昨日の暴風雨は治り、風は少し強いが雲の切れ間から青空がのぞく、金田さん野上さんに別れを告げ、５時４０分小屋を出発、樅沢岳７時２０分、北鎌尾根が目前にはっきり見える。穂先はガス

がかかりチラッチラッと見え、長い縦走をしてきた疲れが、いっぺんに吹き飛んでしまう。千丈沢乗越８時４０分、ここから西鎌尾根である。２年前の春に尻セードで下ったカールを右下に見てどんどん槍に近ずいて行く、槍の肩１０時１５分着く、穂先は所々に氷が付いておりアイゼンを付けたまま登り、頂上で見る景色は雨上りで一層すんで見える様である。薬師の方を見ると彼方に太郎～黒部五郎～三俣蓮華の縦走してきた山波が続くのを見ながら、山のスケールの大きさを感じると共に、縦走の醍醐味を味わうことができ、満足感に浸りながら――１１時１０分槍の肩を出発、ぐんぐん高度を下げ、横尾に着く。星野さんたちとは約半日のづれで横尾で会うことができませんでした。

４／２９　駅出発（０７：００）－有峰湖（１２：００）－折立峠（１４：１０）－折立平小屋（１４：２０）

４／３０　折立平（０７：３０）－太郎山（１３：００）－上ノ岳（１５：２０）

５／１　上ノ岳（０５：３０）－中俣乗越（０６：４０）－黒部五郎岳（０８：２０）黒部五郎岳カール（０８：５５）－黒部乗越小屋（１０：００）－三俣蓮華岳（１２：４０）－双六山荘（１４：３０）

５／２　沈殿

５／３　双六山荘（０５：４０）－樅沢岳（０７：２０）－千丈沢乗越（０８：４０）－槍の肩着（１０：１５）－槍山頂－槍の肩出発（１１：１０）－殺生ヒュッテ（１１：２０）－　一ノ俣（１３：３０）－横尾（１４：３０）－上高地

会　員　動　静

おめでた

内藤正司さん　長女「美恵」ちゃん誕生　　11月11日生

装備係から

今までは内藤さん宅に、例会の為の装備、そして岸本さん宅には、合宿の為の装備を置かさせていただいておりましたが、このたび、内藤さん宅の装備をすべて岸本さん宅で保管していただくようになりましたので、会員のみなさんよろしくお願い申し上げます。

編　集　後　記

梅雨に入っております。

会員の皆様、どうお過ごしでしょうか。

この月報に関する素朴な疑問を一つ。月ごとに出さないのに"月報"とは、これいかに。どうも、月報というのが個有名詞になってしまったようですが、会に入って日の浅いぼくには、どうもピンとこないのです。

もうすぐ夏です。

アルプスの山々が、我々のきたないドタグツに踏まれたいと、待っているようです。(A・K)

……

八甲田山という映画が上映されている。原作は新田次郎の"八甲田山死の彷徨"だ。その試写会のチケットが手に入ったので見に行った。山ヤなら、この映画を見れば感ずるであろう冬山の驚異というものが、様々な面から上手に描かれていた。吹雪のこわさ、雪崩のこわさ、それに権力のこわさが……。

(K・U)

例会のリーダーの方は例会報告をよろしく。

原稿提出先　　〒664　伊丹市春日丘1－3

神　田　章　吉

〒661　尼崎市武庫元町3－9－11

田　中　正　裕